

今回のテキストは、イエス様とペテロが水の上を歩いた話であるが、この箇所が「水の上でも歩ける信仰の厚い人になれ」などということをお教えていないのは明らかである。聖書に書かれていることをそのまま受け取りつつ、この物語が読む者の心に拓いてくれる気づきを、三つの点に絞って学んでみたい。

1) 風を見て…「風」とは空気の動きであるから、本来見えないものである。それを「見る」と記す以上、ここでの「風」も「見る」も文字通りの意味ではない。それは、前進を妨げる抵抗勢力、夜の暗闇、波のしぶきや冷たさ、自分にできないはずのことをしてしまっている戸惑いなどとの直面を意味すると言えよう。そして、それらが私たちをしてイエス様から目を離させる力となることにこの物語は気づかせてくれる。困難との遭遇や環境の厳しさ、自分の能力の限界などとの直面によって、イエス様から目を引き離しがちな自分をここに重ねることができる。

2) 恐れて…聖書はペテロが「恐れ」によって沈みかけたと語る。「風」に象徴される厳しい現状やペテロ自身の能力の足りなさゆえにではなく、恐れゆえに人は沈むのだと言う。ペテロほどの血気盛んな男。ガリラヤ湖をホームグラウンドとするベテランの漁師でも、恐れに震える時があるが、意志の力や経験、能力が尽き果てる瞬間に訪れるこの恐れの時こそが、イエス様との接点となると気づかされる。

3) 「信仰の薄い人だな」…このイエス様の言葉は、決してペテロをバカにしたり叱りつけたりするニュアンスで発せられたものではない。イエス様がペテロにやり直しを命じたり、言われたペテロが落ち込んだりしたのではなく、イエス様ご自身の手によって引き上げられ一緒に船に乗り込んで賛美の声を上げているところに、イエス様の暖かさが滲み出ている。それはまさに、よちよち歩きを始めた元気の子が、親のところに来ようとして転んでしまった時のように、「しょうがないわね」と言いながらも笑顔で引き上げてやる親心のようなものである。

私たち信仰者は、厳しい現実には毎日直面する。そして恐れつまずき沈みそうになる。その時、「自立して一人で立派に歩ける人間になれ」と言うのではなく、手を伸ばして引き上げ、一緒に水の上を歩いてくださるお方こそイエス様(神様)なのだという真理を忘れないでいたい。